

36) わが国における注射に関する成書について

The Textbook on Injection in Japan

日本大学松戸歯学部 ○石橋 肇
吉村 宅弘
武田 和久
佐久間 優
鈴木 邦夫
谷津 三雄

Hajime Ishibashi, Takuhiro Yoshimura,
Kazuhiisa Takeda, Yutaka Sakuma, Kunio
Suzuki and Mitsuo Yatsu, Nihon University
School of Dentistry at Matsudo

わが国に皮下注射を紹介したのは、長崎精得館の医学教師オランダ軍医マンスフェルトであり、彼は最初の皮下注射の4年後の慶応元年（1859）に来朝し、明治元年（1868）まで長崎にいた。その当時精得館で使用した「活人処方録」に、神経痛に対しアトロヒネの皮下注射を行ったとある。次いで明治2年（1869）にボードウィンが大阪の仮病院で皮下注射を行い、またその頃、横浜の梅毒病院で英国の軍医新頓（ニュートン）が昇汞の皮下注射を駆梅剤として用いている。

皮下注射の技術については1871年（明治4年）の「醫事鈔」に簡単に、また、1873年（明治6年）の「皮下注射要略」には詳細に記載されている。また、皮下、筋肉、静脈、腰椎、麻酔など臨床に応用されるあらゆる注射法については賀川哲夫著『実験注射療法』（大正11年11月28日初版）が最初と考えられる。

そこで、演者らの一人谷津が架蔵する『皮下注射要略全』および『実験注射療法 前篇』の2冊を資料とし、報告した。

1. 『皮下注射要略全』

本書は森鼻宗次纂譯、明治6年9月新彫、登龍堂蔵版で、15×22 cm 大の和本で、全14丁（28ページ）からなる。纂譯とあることから、翻訳本であると思われるが、原著が何であるかの記載は見当たらない。

本書の凡例に「一、此書ハ唯輓近發明ノ皮下注射法ヲ略載スルノミニシテ固ヨリ他事ニ關涉セズ、蓋シ其旨趣ハ私家刀圭ヲ執ル者ヲシテ日新救活ノ法ヲ知ラシムルニ在リ故ニ字句文章ノ如キハ

平坦ヲ以テ主トシ、謾ニ粧飾ヲ加エス」から本書出版の意図を知る。

目録から内容を見ると「○皮下注射一凡ノ説、○皮下注入法ノ功用利害、○施用病患ノ表、○皮下注入法ヲ行フノ術、○器械圖式、用藥分量」とあり、ページは記入されていない。

「皮下注入ヲ行フ術」の項をみると「病患ニ由ッテ各別ノ部位ヲ撰ムニ非サレハ上膊殊ニ三稜筋肩着部ニ施スヲ以テ最モ便利ナリトス」とある。しかし、現在この部位は橈骨神経溝、すなわち橈骨神経が走行しているところに近く、この部位に注射を行うと橈骨神経麻痺を起こす可能性のあることが指摘されている。このことについて本書には続けて「時有テ皮下神経ヲ鑢通スルカ為ニ暫時急性疼痛ヲ發スルアリ。然レドモ此等ノ災ニ罹ルコト概ネ罕ナリトス」とあり、神経穿刺の可能性あることを記載しているが、橈骨神経麻痺の可能性については言及していない。

2. 『実験注射療法 前篇』

本書は賀川哲夫著で、13×18.5 cm 大の洋本、全423ページ、正価金4円、克誠堂出版発行である。初版は大正11年1月28日で、同年13年7月3日再版、昭和2年11月5日第3版が出版されている。今回資料としたのは第3版である。

土肥慶藏の序に「近時注射に由來する不幸な出來事の爲に、法廷の問題を惹起することが往々ある。其原因を尋ねると、薬品の選擇の失當と注射技術の未熟との二者が最も多いやうである。…注射技術に關する必要な講習は未だ何人によりても企てられない。…一般の實地医家にとって未だ適當な参考書の備はらないのは吾人の常に遺憾とする所であつた。此際賀川君の此書あるは實に時機を得たものとして吾人の喜に堪えない」とあり、本書のもつ意義を知る。

目次から内容を見ると緒言、第一 技術篇、第二 製剤編からなり、第一 技術編は總論と各論に分かれている。各論は皮下注射、筋肉内注射、静脈内注射など8章からなっています。第二 製剤篇は五章に分かれている。

本書の「第一 技術編、各論の第一章皮下注射中の「五」注射部位」の項をみると「上膊ノ上端三角筋下ノ部ハ疼痛ノ最モ輕度ナル點ニシテ通常ノ場合ニ最モ賞用スベキ部位ナルガ如シ。」とあり、この書でも橈骨神経麻痺の起こる可能性のあ

る危険な部位を皮下注射の注射部位としている。

本書の表題は「実験注射療法前篇」となっているので、後篇もあると思われるが、その後編に関して、本書の最終ページに「実験注射療法後篇内容説明」として「前篇ニ於テハ注射技術ト注射薬製法トヲ述ベタルヲ以テ後篇ニ於テハ第二版ノ薬物篇と同ジク、約五百種ノ注射薬ヲ「イロハ」順ニ配列シテ其作用・適應・用法及用量ヲ詳記シ、本篇ト相俟ッテ注射療法ノ完璧ヲ期スルモノトス」とある。しかし、後篇が出版されたか否かは不明である。

37) 第9回日本医学会会誌にみられる歯科的事項

Contents of Dentistry in the 9th Japan Medical Congress

日本大学松戸歯学部 ○渋谷 鉦
村木 春長
武藤 ゆう
渋谷 幸男
石橋 肇
鈴木 邦夫
谷津 三雄

第9回日本医学会は昭和9年4月1日から5日まで会頭 入澤達吉、副会頭 長興又郎、準備委員長 宮川米次で、東京大学を中心に、5,717名の参加者のもとで開催された。

今回、第9回日本医学会会誌を参考資料とし歯科的事項特に歯科分科会の状況について中心に摘録した。

第9回日本医学会会誌はB5版大であり総ページ数が766ページ、奥付よりその発行年月日は総会開催から約8カ月後の昭和9年12月10日であることを知る。

目次からその内容は、総会記事から始まり、総会演説は「医術の史的考察」富士川 游以下4名のタイトルおよび演説者名が記され、本文中には演説の全内容について記載されている。

また、懇親会記事、展覧会記事、準備記事、残務記事などの掲載があり、さらに、附録として、「医史展覧会陳列品目録」がみられる。準備記事の経過報告に示されているように、本総会では新たに日本医史学会、栄養学会、日本民族衛生学会、

日本内分泌学会を加え分科の数32を算え、歯科学は第28部会であった。なお、中華民国、満州、印度より来賓が列席し、さらに、今回は東京中央放送局の特に第2放送をもって会況が一般に放送されていた。

各分科会の演題数は、32分科会で一般演題に加えて、特別講演および宿題報告が1～3題ずつ行われているが第28部会の歯科学では会長講演1題、宿題報告3題に加えて一般演題70題、さらに準備委員長講演として1題行われていることは他の分科会には見られない。また、他の分科会と比較しても十分な演題数を数えるまでになっている。

なお、32分科会の一般演題数の合計は2,029題におよんでいた。

第28(歯科)分科会は昭和9年4月2, 3, 4日、東大法文経第2号館第31番教室において会長 都築正男、準備委員長 岡田 満、および加藤清治、本永七三郎、問田亮次の各分科委員のもと行われた。

分科会集會概況に「分科会集會次第書ノ編成ニ當リテハ、講演申込ト共ニ、豫メ比較的詳細ナル(一千字以内)抄録ヲ提出セシメ、分科会長ハ之ヲ閱シテ、適宜ニ取捨シ、以テ分科会開催方針タル「臨牀齒科學ノ研究」ノ主旨ニ、副ワンコトヲ努メタリ。從テ、申込演題百二十餘題中約四十餘題ハ之ヲ割愛返却スルノ餘義ナキニ至レリ。」とあり。さらに…「列席セシモノハ約七百名ニ上リ、講演集會第二日午後三時ヨリ開催セラレタル耳鼻咽喉科分科会トノ共同集會ニハ出席者一千名ニ餘レリ」の記載から、その盛況ぶりを知りうる。

第1日(4月2日)は第1部保存歯科学(午前9時より)演題14、第2部口腔外科学(午後2時より)演題12で、その間に分科会会長講演「顎切除」と、分科会準備委員長講演「顎補綴(局部切除顎ニ就テ)」および、牛窪武男氏の宿題報告第1「正常竝ニ病的口腔状態ニ於ケル連鎖状球菌ニ就テ」と、宿題報告第2(午後4時より)花村信之氏の「光線照射療法ハ如何ナル程度迄齒科臨牀ニ應用シ得ルヤ」で1日目が終わっている。

第2日(4月3日)第2部口腔外科学(午前9時より)6題、第3部口腔衛生学(午前10時半より)2題と宿題報告第3、重浦卓一氏の「口腔寄生原蟲ノ臨牀的所見ニ就テ」、第2部口腔外科学